

## ノリス植民地

これまでの植民地経験を振り返ると、同胞間の対立や折衝、土地をめぐる問題などにより、ヴァーレ・ド・リベイラ地方における南部人の植民地戦略は、不運にも失敗に終わった。そして、そのような苦境から脱するために、故郷へのノスタルジアから帰国した者もいれば、新たなスタートを切るべく別の植民地へと向かった者もいた。その際、特に人気のあった行き先が、ヴァーレ・ド・リベイラから北へ約 200 キロメートルの場所に築かれたノリス植民地（以下、ノリスと略す）であった。以前（本誌 2 月号）にも述べたように、ノリスは最も繁栄した植民地であり、当地をブラジルにおける南部文化の揺籃と位置づける歴史家や研究者も少なくない。それでは、ノリスの成功を決定づけた要因とは何であろうか。これまで見てきた植民地と、何が異なっていたのか。これらの点について詳しく見ていくことにしよう。

まず、ノリスを築いたウィリアム・ノリスとその息子ロバートについて紹介しよう。南北戦争以前の南部人の生活史を分析したセリオ・シルバによると、ノリス家はもともと、19 世紀前半の南部社会で一世を風靡した「アラバマ・フィーバー」という移住ブームに乗じて、ジョージア州からアラバマ州へ移住した開拓民であった。彼らは綿花、ジャガイモ、エンドウマメ、トウモロコシなどを栽培し、牛や羊、豚などの家畜を飼育しており、戦争前夜には 360 エーカーの土地と 36 人の奴隷を所有していた。なお、ウィリアムはプランター（大規模農園の経営者）であっただけでなく、弁護士や政治家としても活躍していた。彼は 1839 年から 1845 年にかけて、アメリカ連邦議会においてアラバマ州選出の上院議員および下院議員を歴任した。しかし、南軍の敗北により、彼は築き上げた財産や社会的地位、奴隷を全て失い、その後、1865 年 12 月にロバートと共に「ブラジリアン・フィーバー」の潮流に乗ってブラジルへ渡った。彼らはサンパウロ州のサンタバルバラ・ド・オエステに定住し、そこでノリスを築いて成功を収めたのである。

ノリスの成功の根幹にあったのは、農業であった。ノリス家は、南部人としての文化的共同性を維持しつつ、ホスト社会との齟齬や一線を画す姿勢を一切示さなかった。むしろ、彼らは積極的にブラジル人との関係構築を目指し、後者に対して南部流の農業技術を伝授したり、アメリカ製の農耕用具を提供したりしていた。とりわけ、ウィリアムはニコラウ・ジョゼ・デ・カンポス・ヴェルゲイロという裕福なプランターに綿花栽培の技術を伝授し、ヴェルゲイロはこれにより国内屈指の綿花生産者となった。実際、このウィリアムの姿勢は、南部流のプランテーション経営をホスト社会に適應させ、過去の繁栄を回復しようとする試みであったと考えられている。また、南部人は、ブラジルの農耕用具の質や土地の地質など、現地の自然条件を十分に意識していたとも言われている。

ノリスにおける南部人の経済活動に着目したジョゼ・リオスによれば、南部人たちは、ブラジルの農業技術がアメリカ南部と比べて著しく遅れていることに衝撃を受けたという。というのも、19 世紀後半の当時のブラジルでは、依然として 18 世紀の植民地時代の技術水準のままであり、開墾は進まず、土地も

期待されたほど肥沃ではなかった。さらに、鋤の代わりに鍬のみで耕作が行われていたことも彼らにとって驚きであった。こうした状況に対応するため、南部人たちはアメリカ製の鋤や農作業用の衣類など、さまざまな道具をブラジルに輸入した。実際、テキサス州出身のヘンリー・スティールはノリスで初めてアメリカ製の鋤を導入し、1880 年代初頭には、周辺に定住していたイタリア系移民とともに鋤の製造工場を設立した。このような農業の成功は大きな反響を呼び、その報せは瞬く間に他の植民地に暮らす南部人たちの間に広まり、困窮していた多くの人がノリスへと移り住むこととなった。

農業以外では、学校の設立も南部人の定住を促進した重要な要素であった。学校は、南部人の子弟が母語教育および基礎教育を受ける場であると同時に、“南部人”または“アメリカ人”としてのアイデンティティを確立する役割も果たしていた。南部人たちは順に「コレジオ・インターナショナル」（1869 年）、「コレジオ・マッケンジー」（1870 年）、「コレジオ・ピラシカバーノ」（1881 年）などの学校を設立し、多くの移民 2 世・3 世がこれらの学校に通った。20 世紀初頭には、これらの学校は南部人以外のブラジル人の子弟の受け入れも開始し、“諸文化の平等”という、多様な文化を尊重する教育方針を掲げ、当時としてはきわめて進歩的な教育を実施していた。

このように、ノリスのケースでは、農業活動と学校の設立が南部人の定住およびブラジル社会への同化を促進した。無論、そこにはノリス家の存在が重要な役割を果たしていたが、他の南部人たちもブラジル社会において独自の人的ネットワークを形成し、農業や製造業を通じて地域産業の発展に寄与したのである。彼らがヴァーレ・ド・リベイラの南部人と比べて、より効果的な植民地戦略を展開し得た決定的な要因は、後者が農業の失敗や同胞間の対立に苦しんだのに対し、前者はあらゆる逆境に立ち向かい、それらの否定的要素を肯定的なものへと転換できた点にあった。さらに、南部とブラジルとの文化的差異を前提としつつも、ノリスの南部人は、そのギャップを埋めるような社会関係の構築に成功したのである。

今日、サンタバルバラ・ド・オエステには「アメリカーナ」という都市が隣接している。その名の通り、南部人を冠した都市名であり、現在も多くの子孫がそこに住んでいる。毎年 4 月には、南部人を讃える目的で「アメリカ人の祭り（Festa dos Americanos）」が開催されており、女性は南部の伝統衣装に身を包み、男性は南部連合の軍服を着用してカップルで踊るのが祭りの目玉行事となっている。この祭りでは、南北戦争や植民地の歴史が今も多くの人々に語り継がれている。

## [参考文献]

- Célio Antônio A. Silva. *Capitalismo e escravidão: a imigração Con-federada para o Brasil*. Tese (Doutorado em Desenvolvimento Econômico) – Instituto de Economia, Universidade Estadual de Campinas, Campinas, 2011.
- José Arthur Rios. “Assimilation of Emigrants from the Old South in Brazil”, *Social Forces*. 26 (2), 1947, 145-152.
- Leticia Aguiar. *Imigrantes Norte-Americanos no Brasil: Mito e Realidade, o Canto de Santa Bárbara*. Dissertação (Mestrado em Ciências Econômicas) – Instituto de Economia, Unicamp, Campinas, 2009.